

現代社会におけるハゲ男性に対する俗言に関する一考察  
A study on the rumor of bald man in contemporary society

1K09A154-5

指導教員 主査 友添 秀則 先生

土田 翼

副査 杉山 千鶴 先生

【動機・目的】

筆者は20代の中頃から急激に頭髪が薄くなった。自らの頭髪の量が少なくなり、そして頭髪の分布に極端な偏りが生まれた。自分の頭部が禿頭になるという体験をするまでは、ハゲという現象は完全に他人の問題であり、中年過ぎの男性の悩みの種であるという程度の認識しか持っていなかった。しかし、自らがハゲであるということを知った後は、ハゲに対する言説は逐一、自分の問題として感じられるようになった。そういった経緯のなかで筆者が現在、ハゲに関する言説のなかで一番感心をもつのが、ハゲに対する俗言である。具体的には、「ハゲはエロい」という俗言（以下、ハゲエロ俗言と表記する）である。この俗言は「ハゲは好色である」や「ハゲは絶倫である」と、いくつかの変型をもつが、男性のハゲ頭と性欲の高さや性的能力の高さを関連付けるという内容である。現在、このハゲエロ俗言は男性ホルモンを論拠に毛髪と性欲が関連付けられているように見受けられる。筆者は男性ホルモンによるハゲ頭と性欲の高さとの関係は不変の科学的真理であると証明されたわけではなく、現時点での仮説の一つにすぎないという立場をとることができるであろうと考える。また、男性ホルモン発見以前からハゲエロ俗言の存在は確認することができる。そのことは男性ホルモン説が力をもたなくなった社会において、ハゲエロ俗言がその論拠を男性ホルモンとはまた違うものに変化させて存在しうることを推測させる。であるとするならば、私達が生きる社会は、ハゲとエロを結びつけることを必要とする社会なのではないかといった仮説を立てることができるのではないだろうか。そこで本論文では、このハゲエロ俗言が現代社会においてどのように機能しているのか、その存在様態を明らかにすることを研究の目的とする。

【方法】

先行研究からの文献研究である。

【各章の概要】

〈第1章 ハゲと男性性〉

第1章ではハゲをめぐる相互行為が、からかいという形態をとることを確認し、そのハゲに対するからかいが、からかう側（非ハゲ）と、からかわれる側（ハゲ）の双方にとっての男性性の生産と再生産において役割を果たしていることを確認した。このからかいという行為は、ハゲにとっては、ハゲをからかわれることに堂々と対応することで自身の男性性としての評価を上げる効果を持つため、からかいを無視するという方法で対処することが困難であることを確認した。また、反対に、非ハゲはハゲを攻撃するという事それ自身が、猛々しさや雄々しさといった男性的なイメージとつながり、攻撃するもの自らの男性性を増強させるという働きや男性性として好ましくない外見をもつハゲを攻撃することは、攻撃する男性が、ハゲという男性として好ましくない外見をもつグループの一員でないことを周囲に表明する機能を持ち、また攻撃を加えられている側に比

べ、自らがより男性性として好ましいグループの一員であるということを示すという働きを持つことを確認した。

〈第2章 ホモソーシャル〉

第2章では、男性間の関係はホモソーシャルという概念によって捉える事が可能であり、そのホモソーシャルはミソジニーとホモフォビアを構成要素として持つことを確認した。男同士の性愛をホモセクシュアルといい、性的でない男同士の絆をホモソーシャルというがこの二つは、明確に区別できる概念ではなく連続体として存在することを確認した。連続体として存在するという事は、ホモソーシャルがホモセクシュアルに移行することが容易であるということを示す。しかし、このことは、ホモソーシャルに属する男性にとっては、性的主体としての男性としての地位を危険にさらす。ホモソーシャルの男性が自らを性的主体の地位に固定するために自分を性的客体とする可能性のある男性すなわち同性愛者の男性を排除しようとする働きがホモフォビアであると確認した。また、ミソジニーはホモソーシャルに属する男性が、自分を性的主体であると確認し、承認してもらうために女性を支配下に置く必要から生じる。これは女性を性的客体とし、また女性を劣位者と位置付けることにつながる。これらのことから、ホモソーシャルの基盤となるミソジニーとホモフォビアは、性の主体を優位、性の客体を劣位と位置付ける価値観を共有していると考えることができた。

〈第3章 現代社会におけるハゲエロ俗言の考察〉

エロが性的主体と性的客体との関係を表すための言葉としての意味を持ち、また、その性的主体であるということが男らしさを意味するために自らの男性性としての存在証明に関わる意味を持つことを確認した。ハゲエロ俗言によって、ホモソーシャルの男性は男性性を生産、再生産し存在証明を行っていると考えられる。またハゲエロ俗言の存在によって、ホモソーシャルのホモソーシャルリティも再生産されていく。ホモソーシャルの男性にとっては性的主体である自分にはアイデンティティを求めることができないが、その性質のために、ホモソーシャルではハゲエロ俗言の機能は重要性を保ち、ハゲエロ俗言そのものが、なくなることがない。

〈結章 本研究のまとめ 今後の課題〉

本研究の課題としては日本の現代社会がホモソーシャルであるということを示す必要があること。エロについての文化的な考察がさらに必要なこととハゲエロ俗言の言説研究が必要となることと考えられる。また主体、客体といった二項対立的な考え方自体に問題が潜んでいるという見解に関する検討が必要であろう。ジェンダー/セクシュアリティとしての問題から離れた考察の必要性など今後の研究課題が多岐にわたって明らかになった。